

第1章 構想策定の考え方

はじめに

今、全国でエコミュージアムの取組がひろがっています。そもそもエコミュージアムとは、1960年代後半にフランスで生まれたもので、地域をまるごと博物館にみたくて、地域住民が主体となり、その地域の自然環境や文化、生活、歴史などの魅力を再発見するとともに、それらを地域の財産として守り伝えていこうという運動です。

日本におけるエコミュージアムの取組の内容は、地域によって様々ですが、住民と自治体が一体となって知恵や人材を出し合い、自然や文化などの地域の財産を守り伝え、発展させていこうという活動が、地域の活性化につながっています。

このように、エコミュージアムのような地域の財産を活用した手法が、地域活性化の有効な手段となっています。

1 - 1 構想策定の意義

奄美群島には豊かな自然や伝統・文化など優れた資源・素材が数多く存在しており、これらを活用することにより個性ある地域として大きく発展する可能性を秘めています。

また、「奄美群島自然共生プラン」により奄美群島の優れた地域資源・素材 = “奄美の宝”を探す活動が行われ、群島住民においても、奄美の宝への認識が高まっています。

こうした奄美の宝への認識の高まりを契機に、優れた地域資源・素材を活用した住民の創意と工夫に根ざした主体的・自発的な取組により自立的な発展を目指すという機運が高まっています。

平成16年8月に策定された奄美群島振興開発計画においても、群島の特性を生かした産業の振興や人と自然が共生する癒しの島づくり、群島内外との交流・連携を進め、奄美群島の自立的発展を目指すとされています。

このような中、全国で広がりつつあるエコミュージアムの取組を奄美で展開することは、今後の奄美群島の振興を図るために、最も重要かつ有効な手法と思われます。

この構想は、以上のような背景をふまえ、奄美群島におけるエコミュージアム = 奄美ミュージアムの取組の基本的な考え方を示すとともに、これに基づく、具体的な施策を積極的に推進するために定めるものです。

1 - 2 構想の期間

構想期間は、平成 16～25 年度の 10 カ年とします。また、実施時期は、早急に取り組む活動(実施中を含む)を前半の 5 カ年(奄美群島振興開発計画期間)、中長期的に取り組む活動を後半の 5 カ年と設定します。

1 - 3 奄美群島の現状

奄美群島は、亜熱帯性・海洋性の豊かな自然、世界的にも貴重な動植物、個性的な伝統文化、健康・長寿・癒しに関する資源など他の地域にはない魅力と特性に恵まれており、これらを活用することにより個性ある地域として大きく発展する可能性を秘めています。

今後の奄美群島の振興開発に当たっては、引き続き、社会基盤・生活基盤の整備を図りながら、これまでの振興開発事業等の成果を十分に発揮させるとともに、群島の有する魅力と特性を生かした、住民の創意と工夫に根ざした主体的・自発的な取組により、人と自然が共生する癒しの島づくりを進め、自立的発展を目指していくことが必要であります。

以下、群島の有する魅力や特性、また、産業・観光などについて個別に現状を記述します。

自然	<p>世界的に希少な生物と生態系を持つ自然環境</p> <p>奄美群島は本土から遠隔の外海に広く点在しており、台風常襲地帯に位置していますが、一年を通じて亜熱帯性・海洋性の温暖な気候に恵まれ、優れた景観、貴重な野生動物の生息・生育する森、美しいサンゴ礁やカルスト地形など多彩で豊かな自然環境を有しています。特に、島嶼の成立過程と密接に関わる個性的な生物相を持ち、国内希少種の指定を受けているアマミノクロウサギや、リュウキュウアユ等をはじめとする多数の固有種の存在と、それらの生態系全体に関して、希少性が世界的に再確認され、奄美群島を含む琉球諸島は世界自然遺産の候補地として挙げられています。</p> <p>今後の課題として、世界的に高く評価される奄美群島の特有な自然環境の価値を守りながら、人も生態系の一部であるということをふまえ、人と自然が共生する地域を目指していくことが求められます。</p>
	<div data-bbox="391 1534 699 1758"></div> <div data-bbox="715 1534 1023 1758"></div> <div data-bbox="1038 1534 1369 1758"></div> <div data-bbox="486 1780 574 1803">奄美の海</div> <div data-bbox="837 1780 909 1803">昇竜洞</div> <div data-bbox="1133 1780 1300 1803">アマミノクロウサギ</div>

歴史	<p>海を通じた交流に育まれた独自の歴史</p> <p>奄美史の時代区分では原始から 8・9 世紀ごろまでは「奄美世(あまんゆ)」とよばれています。この時代は、階級社会以前の共同体(マキヨ)の時代で、夜光貝やゴホウラなど南海産の大型貝を交易品とした本土との交流がありました。その後、按司(あじ)という首長たちの支配割拠する階級社会にさしかかり、この時代を「按司世(あじゆ)」と称しています。徳之島で焼かれたカムイヤキが一大交流圏を築いていた時代でもあります。「按司世」に続く 15 世紀ごろからの琉球王朝時代が「那覇世(なはゆ)」であり、藩政時代は「大和世(やまとゆ)」とよばれています。戦後は一時期米軍統治下に置かれていましたが、昭和 28 年 12 月に日本に復帰を果たすことができました。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;"> <div style="text-align: center;">  <p>宇宿貝塚(発掘調査時)</p> </div> <div style="text-align: center;">  <p>小湊フワガネク遺跡群出土品(夜光貝製貝さじ)</p> </div> <div style="text-align: center;">  <p>カムイヤキ</p> </div> </div>
----	--

文化	<p>島唄や八月踊りなど豊かで多様な伝統文化</p> <p>奄美群島には、琉球や薩摩などの文化の影響を受けながら、豊かな自然との共生の中で、島唄、八月踊り、浜下り、豊年祭や十五夜踊りなど安穏と豊穰を祈ってきた伝統文化が、今日でも人々の生活の中に息づいています。そこには、島唄における音階など奄美大島・喜界島・徳之島と沖永良部島・与論島の間では、近世以降の文化の伝来受容によって違った様相が存在する一方で、自然との関わりの中で培ってきた、村人がシマ社会の中で共同体の一員として、支え合い助け合う「ユイ」の精神を今日においても共通して見いだすことができます。</p> <p>こうした奄美の伝統文化が醸し出す「癒し」の空間、雰囲気新たな魅力として注目されており、今後、これらの伝統文化にふれあう機会を積極的に設けるとともに、学校教育や生涯学習の場において、伝統文化の保存・伝承に努めることが重要になっています。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;"> <div style="text-align: center;">  <p>豊年踊り(油井)</p> </div> <div style="text-align: center;">  <p>八月踊り</p> </div> <div style="text-align: center;">  <p>闘牛</p> </div> </div>
----	---

人材育成	<p>地域の魅力を継承し、広く伝える人材の育成</p> <p>奄美群島では、島唄や八月踊り等の個性的な伝統文化や奄美固有の伝統行事が、島唄教室等を通じて大切に継承されています。</p> <p>地域特性を生かした産業の展開をめざすにあたっては、地域の「宝」や魅力を広く伝える媒体としても「人材」が非常に重要となってきます。そのため、学校教育や生涯教育をはじめ、各種の人材育成講座等を展開し、積極的に人材育成を行っていく必要があります。</p> <p>また、インストラクターやツアーガイド等の体験・滞在型観光やタラソセラピーなど奄美の癒しの資源を活用した観光等に積極的に取り組む人材の育成が求められています。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;"> <div style="text-align: center;">  <p>人材育成事業</p> </div> <div style="text-align: center;">  <p>手熟師会</p> </div> <div style="text-align: center;">  <p>民謡教室</p> </div> </div>
------	---

産 業	<p>地域の特性を生かした産業の展開</p> <p>奄美群島では、サトウキビやトロピカルフルーツ、花きなど亜熱帯海洋性の温暖な気候を生かした農作物の栽培や、恵まれた水産資源、温暖な静穏海域を生かした栽培漁業や養殖業が盛んです。</p> <p>また、大島紬や黒糖・黒糖焼酎など、奄美ならではのものに対する注目が高まってきているほか、広葉樹やリュウキュウマツを生かした木製品、キビ酢やウコンなどの健康食品、自然塩など新しい商品開発への取組がはじまっています。</p> <p>今後、奄美群島の振興開発に当たっては、温暖な気候や広大で美しい海、豊かな自然、長寿・子宝の特性、個性的な文化とそれに基づく産業といった地域の魅力を生かした新しい地域産業の振興を図っていく必要があります。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;"> <div style="text-align: center;">  <p>奄美群島の伝統的な工芸品</p> </div> <div style="text-align: center;">  <p>黒糖焼酎</p> </div> <div style="text-align: center;">  <p>タンカン狩り</p> </div> </div>
--------	---

観 光	<p>豊かな自然と個性的な文化を生かした観光</p> <p>奄美群島への入込観光客は約43万人(平成15年)で、近年は長引く国内景気の低迷等の影響から横ばい・微減傾向となっていました。平成15年は奄美群島日本復帰50周年記念行事が開催されたことなどから前年より増加しています。</p> <p>近年の観光は、「体験型観光」や「エコツーリズム」など「見る観光」から「体験する観光」へと観光ニーズがシフトしてきており、奄美群島の有する豊かで優れた亜熱帯性の自然、個性的な伝統芸能・伝統文化等への注目が高まっています。奄美群島内においてもシーカヤックやダイビング等の体験型観光・エコツアーの充実が図られてきています。</p> <p>今後、奄美群島の豊かな自然を生かしつつ共生していく新たな観光の展開が期待されています。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;"> <div style="text-align: center;">  <p>カヌーツアー</p> </div> <div style="text-align: center;">  <p>泥染め</p> </div> <div style="text-align: center;">  <p>金作原原生林</p> </div> </div>
--------	---

交 流 ネ ッ ト ワ ー ク	<p>群島内外との交流ネットワークの形成</p> <p>平成11年に設立された「奄美・やんばる広域圏交流推進協議会」による様々な事業・活動をはじめ、地理的・歴史的・文化的につながりの深い沖縄と、地域の主体的な取組による交流・連携が進展しています。また、国内各地にある奄美群島出身者の会(郷友会)や鹿児島県離島振興協議会が運営する「しまのサポーター」により、様々な交流ネットワークが形成され奄美群島内外の交流が進められています。</p> <p>国際交流の面においても、与論町などの市町村が海外の都市と姉妹都市盟約を結んでいるほか、徳之島において韓国清道郡と闘牛による交流が進められていることに見られるように地域資源を生かした交流が行われています。</p> <p>交流人口の拡大等による地域社会の活性化を図るため、今後、地域内外との交流・連携を進めていく必要があります。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;"> <div style="text-align: center;">  <p>やんばるとの交流</p> </div> <div style="text-align: center;">  <p>世界の奄美人大会</p> </div> <div style="text-align: center;">  <p>しまのサポーターHP</p> </div> </div>
--------------------------------------	--

1 - 4 奄美の「宝」の整理とその活用

(1) 「宝」(地域資源)の整理の考え方

独自性、共通性を浮かび上がらせるための整理

奄美群島には優れた、また魅力的な資源が多く存在し、それは奄美の「宝」と位置づけられています。固有種・希少種を多く残す希少な自然、歴史、伝統芸能、伝統産業、農林水産資源、長寿につながるライフスタイルや食文化、スポーツに適した気候等、それは様々な分野や次元にわたって広がっています。奄美の「宝」を磨き、地域づくりや産業振興に生かしていくためには、その特性や現状を把握するとともに、わかりやすく整理しそれぞれの独自性や奄美群島としての共通性を浮かび上がらせることが重要です。

所在地、分野、テーマ、キーワードによる分類・整理

奄美の「宝」を整理する方法としては、「所在地」、「分野」の他、「テーマ」、「そこで・それを使って何ができるか」といった「キーワード」によって整理することが有効です。このような分類・整理によって、様々なレベルでの理解や目的に合わせた活用が容易になります。また、データベース構築の際の基礎情報ともなります。

* 具体的な奄美の宝については参考資料編を参照のこと。

	内容	(例)	効果
分類1	所在地 (島別、市町村別)	北大島・南大島、喜界島、徳之島、 沖永良部島、与論島	地域の個別理解 各島、地域の理解
分類2	分野別	自然系、人文系、産業系、施設系など大きな分野 でわけるとともに、さらに詳細に分野分けを検討し ます。 自然系資源:景観、海浜、動物、植物 等 人文系資源:歴史・史跡、信仰、伝統行事・祭等 産業系資源:農林水産、伝統工芸、特産品 等 施設系資源:自然、公園、体験・レジャー 等	奄美の横断的理解 奄美全体の多様な魅力の理 解
分類3	テーマ別	「心癒す」「体癒す」「絆癒す」	イメージの明確化
分類4	キーワード別	「佇む」「唄う踊る奏でる」「語る聞く笑う」「つくる」 「味わう」「遊ぶ」「暮らす」「働く」「発見する」等	活用がイメージしやすい

(2) 「宝」(地域資源)の活用

新たな産業クラスター、魅力的な観光ルートづくりへ展開

独自性や共通性を明らかにすることにより、それらを有機的に結びつけることが容易になり、新しい産業クラスター が生まれやすくなったり、また、個性的で魅力的なストーリー性のある観光ルートづくりが可能になります。

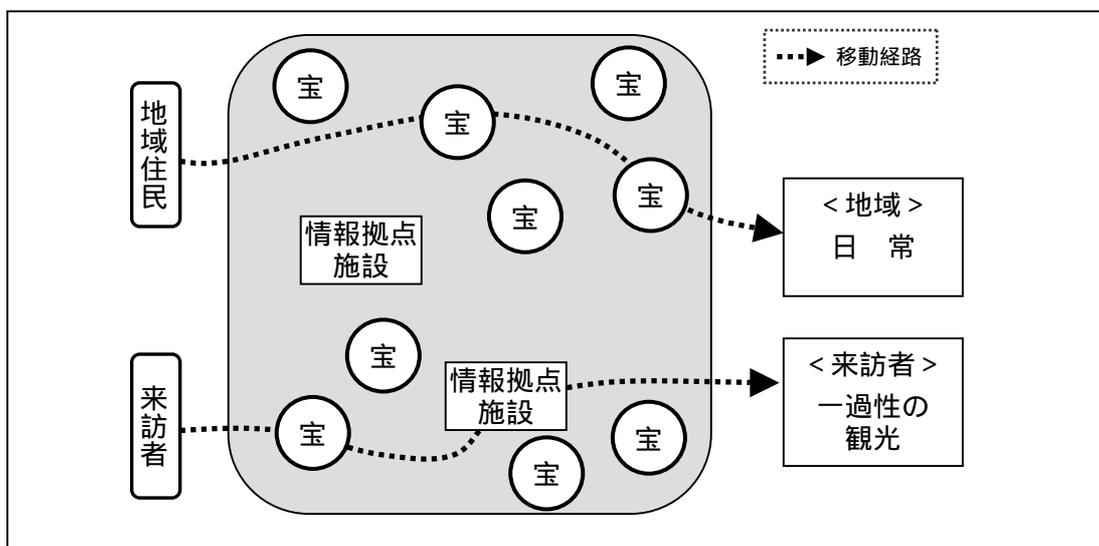
また、特定のテーマで「宝」どうし、あるいは関連する施設等を結び、ストーリー性のある多

様なルートも構築できます。ルートは見学主体ではなく、体験やものづくりといった来訪者が自ら当事者となる内容とする必要があります。これにより、感動を持って地域を巡り、結果的に奄美の深い理解につなげることができます。

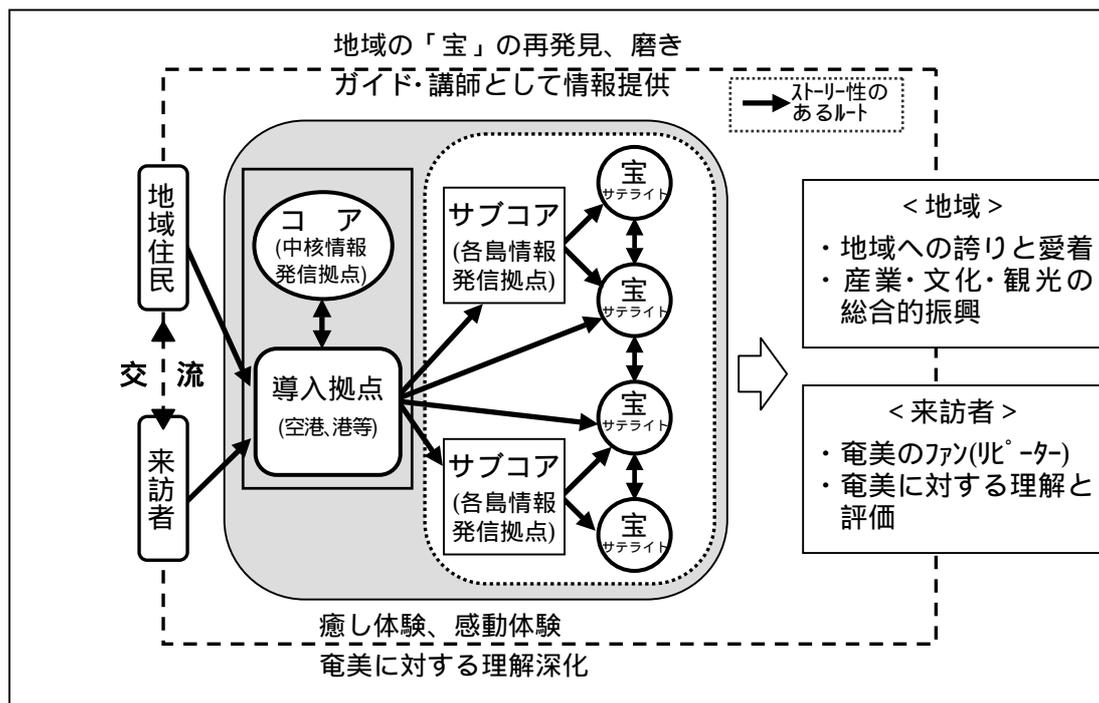
産業クラスター: クラスターとは、本来「ブドウの房」の意味ですが、群や集団を意味する言葉としても用いられます。特定の産業分野については、資材供給・生産・流通・販売などの関連企業や、金融・教育・研究などの支援機関が地理的に集中し、それらが競合しながら有機的に結びついている状態です。

イメージ図 これまでの「宝」とこれからの「宝」

現在の奄美の「宝」をとりまく環境（これまで）



奄美ミュージアムにおける「宝」の環境（これから）



(3) 「宝」を活用した奄美ミュージアムの取組

奄美の「宝」を整理し、それを活用していく奄美ミュージアムの取組を図示(イメージ図)すると、次のようになります。

イメージ図 「宝」を活用した奄美ミュージアムの取組

